

第3分科会

2歳児のあそびに満ちた保育を探る

～絵本を通して結びつく喜び～

指導助言者 田丸 尚美 (広島都市学園大学教授)

発表者 国岡 由佳 (認定こども園 ひかりこども園)

山本 和 (認定こども園 ひかりこども園)

司会者 松田 倫子 (認定こども園 ひかりこども園)

記録者 坂口 菜摘 (認定こども園 ひかりこども園)

1 発表の概要

(1) 主題設定の理由

新制度の導入に伴って開設されたこども園では、愛着形成を基礎とした情緒の安定や、他者への信頼関係が形成される「乳児期」から保育を担うことを踏まえ、一人ひとりの発達の特長や個人差を大切に保育を行うことが求められている。

本園は、一人ひとりを大切に保育を行うことを理念としており、平成24年度より、幼保連携型認定こども園となる。幅広い年齢層となったため、まず乳児期から幼児期にかけての子どもの発達と生活の実態を知り、それぞれの年齢にふさわしい生活や遊びは何かを見つめ直すため、保育検討会をもち定期的に研究を行うことにした。

本研究が、5年目に入ったとき、0、1、2歳児の育ちが土台となって幼児教育が成り立つことを確認し合い、特に、3歳未満児と3歳以上児の接続である2歳代に視点をあて、乳児から幼児へと成長し、自己主張が強くなり活動力が拡大する2歳児の心の変化を追いながら、保育を検討することとした。

(2) 取り組みについて

2歳児クラスのうち、低月齢児中心（7月から3月生まれ）のたんぼぼ組（園児15名 担当保育者3名）の実践を取り上げ、“自分のことが大好き”とすることができる自己肯定感や“みんなと一緒に楽しい”と仲間へ向ける共感を育むために、一人ひとりの思いをどのように受け止め、どのような遊びを通して、友だちへの興味をつないできたか、保育実践の読み解きを行っていった。その中で友だちと同じ絵本を共有し楽しむ姿から、子どもたちを結びつける題材として絵本を手がかりに、どのように遊びをつなげ、展開していくか研究を進めていった。

(3) 実践例【エピソード記述から見る子どもたちの姿】

① 第I期（4月）「安心して」

<4月>じっとしてなんかいられない～みんな思い思い～

【たんぼぼ組の子どもたちとの出会い】

新学期、初めて出会う子どもたちと、楽しいクラス運営をしようと張り切っていた保育者。しかし、“新しいクラスになったことを喜ぶと同時に、視野が広がって園内を自由に行き来する進級児と、慣

れない環境に涙し不安定な新入園児とが入り乱れ、なかなか生活の流れが作れずにいた。

廊下を走り抜け園内散歩を始める子、職員室を心のより所とし入り浸る子と、まさに自由…。午睡前の絵本タイムでは、ゆったりと一息つける時間を設けようとするものの、「〇〇ちゃんが！」「〇〇くんも！」と保育者にまとわりつき、どの子も絵本そっちのけ…。とても絵本を見る体勢にはならなかった。そして、一対一での関わりを必要とする子どもたちは「ぼくを見て！」「私を見て！」と自己主張が強く、甘えきれない不安定さが伺えた。

そのような姿を見せながらも、興味のあることにはまっしぐらにパワーを発揮する子どもたちに、担任として、次のような願いをもって、保育にあたることを話し合った。

- 子どもたちの自己主張をしっかり受けとめ、「自分の気持ちをわかってくれた・受け止めてくれた」と感じてほしい
- 個から集団として結びついていく為に、「いっしょは楽しい！」「つながるって嬉しい」と感じ、イメージの共有や共通した体験を、何度も繰り返していく中で、友だちの存在を、嬉しく思えるようになってほしい

4月新年度初めての春の参観日。保護者にべったりくっつく子、「ママがいい」と離れられず少し涙する子と、普段と違う雰囲気気持が不安定になっている姿が伺えた。そこで、子どもたちの甘えたい気持ちを満たすことを願い、計画していた親子でのふれあい遊びを行ったところ、いい表情や笑顔を見ることができた。そして参観の最後には、子どもたちのエネルギーを受け止める題材として大型絵本「はらぺこあおむし」をメロディーに乗せて、一緒に楽しむことにした。

(エピソード①) くいついた！大型絵本「はらぺこあおむし」

子どもたちは、大好きなお家の方の膝の上。保育者は、大きな絵本を取り出し、メロディーに合わせて絵本をめくっていく。進級児は、1歳児クラスの頃より慣れ親しんでいた為「あ〜！」「あおむし！」と反応する。新入園児は、絵本に目を丸くし、親子で微笑み合っていた。時々「げっつようび〜」と歌ったり「パクパクパク〜」と食べる真似をしたりして、CDの歌に合わせて心地よいリズムを感じながら食いつくように見ている。その姿から、親子でいる安心感や心地良さがあつたからこそ、お話の世界を楽しめているように感じた。

翌週より「あおむしがいい！」と、絵本とCDデッキを指さしては訴える**あっちゃん**と**いっちゃん**。保育者がCDを流し絵本を開くと、他の子どもたちも集まってきた。「ぼくが！わたしが！」の争いはなく夢中で絵本を見た。最後のシーンで、あおむしがさなぎから蝶に成長するとき、保育者は絵本をヒラヒラさせ蝶に見立てる。手を伸ばしたり、両手をひらひらさせたりする姿があつた。読み終わると「もういっかい！もういっかい！」とせがんだ。

このころより子どもたちの間で「あおむしブーム」が巻き起こった。あおむしが様々な食べ物を食べていき、最後は大きな蝶に成長するこのお話。子どもたちが好きなのは、さなぎが蝶に成長した場面や、CDから奏でられるストーリーを歌う曲。繰り返しお話を楽しむ中で「楽しい！面白い！」を感じている様子が伺えるようになっていった。それぞれの自己主張が強い子どもたちだが「はらぺこあおむし」との時間は特別であり、みんなと一緒に楽しむ大切な時間となっているように感じた。

② 第Ⅱ期（5月～7月）「感じて」

<5月> もういっかい！ もういっかい！

生活の中で「はらぺこあおむし」の絵本がかかせないものになっていた頃、もっとお話の世界を身近に感じることができるよう、保育室の環境をより絵本に近いものにしてみることにした。興味・関心の強い子どもたちの姿から、思いっきり発散して遊ぶことのできる教材を使い、「あおむし」や「くだもの」などを表現できたらと考え、「ローラーと絵具」この二つの教材にたっぷり触れ、楽しませようと準備をすることにした。

(エピソード②) お部屋が、はらぺこあおむしの世界に！

机一枚分程の模造紙に、2歳児でも操作しやすい5cm幅や10cm幅のローラーを使った。赤い絵具は「りんご～」橙色の絵具は「オレンジ！」などと子どもたちと一緒に、食べ物をイメージしながらローラーを滑らせていった。中には、紙だけには納まりきらず「もっともっと！」と、ローラーと共に気持ちがどんどん広がっていくことに、楽しさを覚えた子どもたちの姿があった。「まだしたい！まだしたい！」との声も多く2日間続けて遊んだ。

後日、保育者がローラーで遊んだ紙を使い、「あおむし」や「くだもの」「さなぎ」などを作った。子どもたちが喜んで登園できるような環境作りを目指しながら、気づかれぬよう、こっそりと準備を進めていく。丁度出来上がった時期がゴールデンウィーク目前。子どもたちの驚いた表情を思い浮かべながら連休が明けのを待った。

月曜日、子どもたちは「あおむし～！」「すもも！」「りんご！」などと大喜びで壁面を見ていた。「この前コロコロした絵具で作ったんだよ！」と伝えると「え～！」と嬉しそうに笑う。そんな中、**うーちゃん**が保育室を見渡し「ちょうちょおらん」と言った。

壁面にあおむしやくだものを貼ってからというもの、登園する子どもたちは、毎朝嬉しそうに指を差したり、朝から「あおむしよんで！」と言いに来たりするようになる。

そして、**うーちゃん**の声を聞き、次は、どのようにして製作しよう・・・と保育者同士で話し合う。子どもたちが興味を示し、満足味の味わえるものとして、指絵具でデカルコマニーをして表現し、一人ひとりのちょうちょを作ることにした。

(エピソード③) ちょうちょ！ちょうちょ！ぼくのちょうちょ

指絵具の感触を手のひらや、時には腕、脚、ほっぺなどに付けながら子どもたちと味わった。後日、出来上がった作品を壁面に飾ったところ、自分だけのちょうちょに大喜びの子どもたち。エピソード②に出てきた**うーちゃん**の「ちょうちょおらん！」の発言から子どもたちにとって、このお話のストーリーが、しっかり定着していることへの気づきと驚きを感じた。

<6・7月> 「ぼくが！」「わたしが！」

このころ、活動範囲が広がり、友だちとの関わりが増えてきた子どもたち。自分の物欲しさに友だちを押ししたり、噛みついたりということが多くなっていた。そこで、保育者は「自分だけの物」を求めて取り合いになる子どもたちの姿から、一人に一匹ずつの『あおむしくん』をプレゼントしようと考え絵本を見ながらあおむし人形を作ることにした。

(エピソード④) 絵本の中から出てきたよ！～ぼくだけのあおむしくん～

6月9日雨の日。保育者が、『はらぺこあおむし』を読んだ後に、あおむし人形を登場させた。その瞬間「あ、あおむしだ！」と目を輝かせる子どもたち。「みんなのところにお友だちをつれてきたよ」と言うと、両手を広げて、「欲しい！」とアピールする子どもたち。今すぐにでも、触りたい、遊びたいという気持ちが伝わってきた。その日は、みんなで『あおむしくん』とたくさん遊び、床を這わせたり、お話に登場する食べ物を探して口に運んだり、とそれぞれのイメージで『あおむしくん』のお世話をしていた。その中でもかつちゃんは、自分の赤ちゃんのようにやさしく抱っこしてお布団に入ったり、「りんご食べる？美味しいね」と声をかけたりしながら過ごしていた。トイレの便座に座るのを渋っていたが、保育者があおむしくん人形をトイレの前に置いて『あおむしくん』が応援しているよ～と声を掛けると、笑顔になり「行ってくるよ」と『あおむしくん』が励みにもなっていた。

中でも、かつちゃんは、人形に対して人一倍愛情をもっており、かつちゃんの本来持っている優しさや気遣いが伝わってきて嬉しくなった。自分の領域が守られ、取り合わなくてもよい安心できる環境の中で、人形との世界をたっぷり楽しんでた。しかし、何度か遊ぶ中で『あおむしくん』の扱いが乱暴になり遊びが発展せずいつしか棚の上の『あおむしハウス』の中で、子どもたちを見守る存在となってしまった。

③ 第Ⅲ期 (8月～12月) 「いっしょに」

<8～10月>「一緒に、それ！やりたい」

(エピソード⑤) あおむしくんは、みんなをつなげるお友だち…【スライド、資料で紹介】

運動会では、子どもたちと手作りしたはらぺこあおむし号を使って競技を行った。春から、0歳1歳児もはらぺこあおむしの雰囲気を楽しんできたので、運動会で未満児共通の競技テーマにした。そうしたことで、益々はらぺこあおむしが3歳未満児に広がり、子どもたちの興味関心が家庭にも繋がった運動会となった。

<11・12月>なりきるって楽しい！

運動会が終わったころ、自分たちで、より想像を膨らませ、自然とその場にいる友だちと、短い時間ながらごっこの世界を共有し合うようになっていた。

エピソード⑥「ぼくも」「わたしも」あおむしくん

一番けんかや噛み付きが起こりやすい時間でもある給食後の片付けや着替えの時。クラスで一番月齢も低く、思い通りにしたくて突差に噛んでしまうことの多いえっちゃんが保育者が持ってきていた『はらぺこあおむしのミニ絵本』を発見。一人で読んでいた。友だちが興味を持ち近寄る。いつものなら、その時点で「わたしの絵本が取られる」と察し(ガブリッ)といくところ。緊張感を抱きながら見守る保育者。お友だちが「みせて～」と声を掛ける。「うん～、じゃあ、よんであげようか？」と初めのページに戻り、絵本を開いた。本を2人の方に見えるように持ち替えて歌い始め、他のお友だちも寄ってきて一緒に歌い始めた。天井から吊るしてある巨大ちょうちの下で、膝をくっつけ合って座っている4人の子どもたちとえっちゃんの歌い合うほんわかとした様子に、緊張がほぐれ、思わず微笑み合う保育者たちだった。

また、数日後。遊戯室で遊んでいると、うーちゃんがハイハイをしている。「お散歩しているのはだあれ？」と尋ねると、「あおむしくん！」とうーちゃん。それを聞いて次々に、ごちそうを探して数人があっちにハイハイ。こっちにハイハイ。お散歩が始まった。ごちそうをみつけたのだろう、「ぱくぱくぱく・・・」両手を口元に持っていき笑顔をこぼしながら食べている。部屋に戻る道中もまだ『あおむしくん』のままの子どもたちは、四つん這いになってスタンバイしている。「うーちゃん、あおむしくん」「〇〇も！」と次々に・・・気が付くとみんなが四つん這いに。保育者も一緒に、もそもそとあおむしになって、保育室までの帰り道を、『あおむしくん』の行進で楽しんだ。いつもの道や景色も、目線が下がり小さな虫の気分で長旅をしたみんなだった。

この頃には、『はらぺこあおむし』のおはなしが、子どもたち一人ひとりのものになったことで、近くにいる友だちと遊び始める姿があちこちで見られた。、一人で楽しんでいた遊びから、「一緒にあおむしになると楽しい!」という気持ちに、変わってきていた子どもたち。『あおむしくん』を通して、友だちとのやり取りが増え、一緒に遊ぶようになったことで、同じ気持ちで過ごせる時間に心地よさを感じ、イメージを共有して遊ぶ姿に、春との違いを感じた。

④ 第IV期 (1月～3月) 「よろこんで」

<1～3月> おしゃべりが嬉しい!楽しい!

子どもたちの『はらぺこあおむしブーム』が少し薄れかけていた1月上旬。ほとんどの子どもが3歳を迎え、語彙も増え、友だちとのやり取り、保育者との会話もたくさん出来始める。また、友だちのしていることや持っている物に興味をむけ、自分の思いを伝えきれずに取り合いになったり、噛みついたりする姿もあった。しかし、春の子どもたちと違うのは、保育者が尋ねると自分なりに伝えられるようになったことだ。その中でも、自分の思い通りに行動したい「**いっちゃん**」は相変わらず友だちとぶつかりがちで、大人に注目してほしいという思いが強く、様々な形で『見て見てアピール』をし、動きも活発である。その反面、絵本が大好きで、集中して見入る姿もあった。1月になると、お正月の経験から毎年、園全体で「昔あそび」に親しんでいる。たんぼぼ組では春より遊んでいる『わらべうたあそび』で「だるまさん」や「うちのうらのねこ」など繰り返し楽しむ姿がある。中でも、いつも積極的に遊んでいたのが、「**いっちゃん**」。『わらべうた』で遊ぶととても穏やかになり、楽しさを友だちや保育者と共有する姿があった。そこで、わらべうたを題材とした絵本「わらべうたであそびましょ」を読んでみることにした。 【=絵本の紹介と読み聞かせをする=】

エピソード⑦ 絵本「わらべうたであそびましょ」であそぼう

冬休み明けの久しぶりにみんなが揃う日、さっそく子どもたちに読んでみることにした。案の定、くいついたたんぼぼ組のみんな。絵本に合わせ「いっぼんぼしこちょこちょ」を歌うと、自然に友だち同士で手のひらをくすぐる姿が。周りの子も真似をしだす。続いて「げんこつやまのたぬきさん」「だるまさん」なども、歌ったり友だちと顔を見合せたりしながら楽しむ姿が見られた。「なべなべそこぬけ」の場面になると、「**いっちゃん**」が立ち上がり「**あっちゃん**」とペアを組んだ。2人が呼吸を合わせ「なべなべそこぬけ～そ～こがぬけたら・・・」と腕の中をくぐろうとする。しかし上手くいかない。何度か挑戦し、やっとくぐれた時には「せんせいみて～!」と2人とも得意げな表情を見せるのだった。いつも我が道を行き、友だちと上手く繋がれずにいた「**いっちゃん**」だが、「**あっちゃん**」と息を合わせ一緒に遊びを共有するその姿を見ると、保育者も驚きと喜びが隠せなかった。最後は、みんなで「かごめかごめ」をして「さよならあんころもちまたきなこ」を歌いながらお話を終えた。

この後も、「**いっちゃん**」は「なべなべしたい!」と言い、友だちと思いを共有する喜びをたっぷり味わえた時間となった。

エピソード⑧ 「まだカレー食べとらん！」～友だちと結びつく喜び～

「わらべうたであそびましょ」を読み最後にみんなで「かごめかごめ」をして遊んでいたある日。順番に、『かごの中の鳥』役を交代し、**いっちゃん**の番が来た。「後ろの正面だあれ～？」と歌っても中々答えない**いっちゃん**。ヒントを出す。誰が後ろにいるのか分かっているはずなのに、腹ばいになりうずくまったまま答えない。(まだ鳥の役を続けていたいから答えないのかな・・・)

すると突然「まだカレー食べてない！！」と言う**いっちゃん**。何の事？とみんなの頭の中に「？」が浮かぶ。再び「まだカレー食べてない！！」その言葉にハッとした。絵本では、「なべなべそこぬけ」をする場面に味噌汁の鍋とカレーの鍋が登場する。そして、その次が「かごめかごめ」に繋がるストーリーとなっている。その事を言っているのでは？

そこで「じゃあ、みんなでカレーを作って食べようか！」と提案し「カレーライス」の手遊びを**いっちゃん**を囲みながら行った。みんなも思いは同じ。みんなでやって見せた。カレーが出来上がり**いっちゃん**に「どうぞ」と言いながらカレーを食べる真似をした。すると、やっとな顔を上げ、パッと後ろを振り向き「〇〇ちゃん！」と答えたのだ。**いっちゃん**のお話のイメージをみんなで受け止め、そのイメージを共有する事が出来た時間だった。

「はらぺこあおむし」同様に絵本や歌を通して、繰り返し楽しむことが出来た。あそびの中で気付く仲間の発見。**いっちゃん**の発する言葉は少なくとも、みんなが思いを理解し受け止めたことで、気持ちを通じ合わせることができた。また、**いっちゃん**自身も自分の思いを出せる、友だちや保育者がいたからこそ摂った行動だったのかもしれない。友だちとのつながりを感じ、クラス全体の成長が垣間見え嬉しい場面であった。【＝エピソード④のかっちゃんの年度末の姿を紹介＝】

(4) 反省と考察

新学期を迎えた当初は、クラスをまとめなければという思いがあった。しかし、自己主張が強く活発な子どもたちの姿を見て、難しいと感じ悩んだ春。そこで、自分の思いや欲求を沢山発信する子どもたち、一人ひとりを大切に、受け止め寄り添っていくことを重点に置き1年間を過ごしていった。

2歳児の特徴である、「イヤイヤ」「こだわり」「友だち同士のトラブル」などが毎日のようにあった中、絵本を手掛かりに、イメージを共有し子どもたちを繋いでいった様子から、改めて教材の提供、環境づくりの大切さを感じることができた。また、どんな活動に対しても、くいつきが良い反面、飽きるのも早い子どもたちに対して、保育には必要不可欠である、遊びの展開の仕方や環境の工夫をすることの難しさも痛感した。しかし、エピソード記録をとり、読み取りや保育の意図について丁寧に話し合ったことで、遊びが盛り上がり『子どもたちと一緒に』に楽しい保育を作っていくことにも繋がっていったように思う。

(5) まとめと今後の課題

自我が拡大し、活動量も増えエネルギーに満ち溢れていた2歳児の子どもたちは、一人ひとり表現の仕方も違い、心が揺れるタイミングも違う。しかし、春秋にかけての『はらぺこあおむし』のお話を通して、うたや絵、ストーリーに興味をもち、「友だちと一緒に」という思いを重ねていきながら友だちへの気持ちが広がっていった。また、冬には“わらべうた”を楽しむ中で「友だちが自分の気持

ちをわかってくれた」「受けとめてくれた」を感じながら自然に仲間作りが出来ていったように思う。
“個”から友だち（仲間）へつながっていく2歳児という時期に“自分の気持ちが受け止められた”という実感や“友だちといっしょ”という心地よさといった“友だちを感じる経験”が、生きる力の大切な土台となっていくのではないかと感じた。そして、2歳児の育ちを保障していく保育とは、安定・安心が保障された生活、「繰り返し」が満足いくまで保障された生活、「文化」を築きあえる仲間づくりが保障された生活を、子どもたちと共に作っていくことだと思う。

そのため、

- 一人ひとりに寄り添った細やかな行動の読み取りで内面を探り、共感や気持ちの共有をしながら、“自分のことが大好き”と感ずることができるようになること
- 「同じ」や「またしよう」といった経験をたっぷり繰り返す中で“友だちと一緒に楽しい”という共感を育みながら『仲間づくり』をしていくこと、振り返りや記録の取り方や活かし方を保育者同士で話し合い、連携を密にし保育に繋げていくこと
- 教材の提供のタイミングを図り、その場その時にあった環境づくりを工夫していくことを課題として、今後も保育者同士の連携、学び合うことの大切さを胸にとめ保育に取り組んでいきたい。

2、研究討議

(1)発表内容に対する質疑応答

Q: 保育検討会はどの程度の頻度で行っているのか

またどういう形で行っているのか

A: 月に1回程度で、田丸先生にも加わっていただきながら行っている。その際それぞれが、保育のエピソードで良かった場面、困った場面の記録を持ち寄り、それをもとに保育の悩みなどを話し合っている。

Q: 部屋の隅にいったあおむし人形は、その後どうなったのか?

A: 子どもたちが時々、思い出したようにあおむしを求めて、登場することはあったが、遊びは広がらなかった。資料にも載せた通り、乱暴な扱いになってきた、自分だけのあおむしにならなかったなど保育者間で反省点がいくつか出てきた。



(2)全体討議

◆ 6つのグループに分かれて討議を行った。

討議の柱

- ① 子どもの読み取りや保育の検討について（保育者間での共有・幼児理解の仕方）
- ② 2歳児にとっての絵本について（絵本の役割・遊びにつながったエピソード・おすすめ絵本）
- ③ 2歳児の遊びへのしかけについて（遊びが繋がったこと・しかけたが続かなかったこと）

① について

- ・日々の保育の記録をとり、毎日1時間程の共通理解する時間を作っている。(幼稚園)
- ・なかなか時間が取れず、月に1回程度で職員会・報告会をしている(保育園、認定こども園)
- ・主任間で話し合いを持ち、その話を学年におろす(大規模)
- ・午睡中に話し合い、同じ目標を持ち保育の方向性を統一して保育するように心掛ける。
- ・保育者の思いが詰まっており、エピソード記述の良さを感じた。

② について

- ・繰り返し見ることで世界作りが出来る、絵本から外の世界に繋がりやすくしてくれる
- ・イメージの共有、信頼関係の芽生え、言葉の取得、認識の基礎、集中力をつける
- ・お気に入りの絵本があることで安心感、楽しみがあり、生活の潤いになっている。
- ・ごっこ遊びに繋がる

(おすすめ絵本)

ぞうくんのさんぼ、おばけがぞろぞろ、きんぎょがにげた、ワニワニシリーズ、やさいさん
ダンゴムシのころちゃん、だるまさんシリーズ、まるてん いろてん、でんしゃバイバイ

③ ついて

- ・無理に遊びを繋げるのではなく、子どもの姿・つぶやきから読み取って遊びに繋げていく。
→遊びが長続きしやすい、子どもがしたいという気持ちが出やすい
- ・絵本から生活へ繋がった(あめふりくまのこ→雨の日の遊び)
- ・繰り返し読んだが、興味を持たなかったり、あまり響いていないように感じた。
→絵本を出すタイミングや読む時期が関係していると反省した。
- ・2歳児は集中力が続かないので、子どもに合わせて音楽を取り入れるのも良いと思う。

3、指導助言

研究をする中で、まず、(討議の柱の①でもあった)子どもの読み取りや、保育を検討するためには、実践を、どういう形で記録に残したら良いだろうということについて考えた。事例を検討するのではなく、保育の質を高めあう為の保育の検討に、その資料として、保育者の意図が込められた記録が必要である。そこで、あえてエピソードの「記録」(単なる行動記録)ではなく、「記述」として、(鯨岡峻先生の『エピソード記述』に関する本を参考に)少し肩の力を抜いて、保育の振り返りの記録に今回はチャレンジした。保育の検討を、単なる紋切り型の、保育を客観的な見方で終わらせるのではなく、もっと具体的なものを求めた時に、保育者の思いや意図を、子どもの読み取りと重ねていくことで、保育場面が具体的に思い浮かべることが出来る記録の方法として提案させてもらった。保育を語り合う資料として、この、保育者の思いを込めた記録「記述」が、どこまで保育を検討するツールとして高められていくのか、また、どういった資料が必要か、各園で、これからもっともっと、検討し合ってほしいと思う。

次に、絵本について(討議の柱の②でもあった)、今回、2歳児と、『はらぺこあおむし』の絵本の出会い方、CDでの導入ということには正直驚いたが、議論していく中で、絵本との出会いには、子

どもの状態に応じて様々なタイプがあっても良いのだと学んだ。子どもと一緒に絵本の世界の楽しむ参加型の出会い、遊びに発展するようなイメージを重視した出会い、ホッと心を落ち着けるような絵本の世界にすっぽり浸っていける出会いなど、それぞれに、その絵本と子どもの出会いがある。『絵本』という題材は、子どもの実態や、そのクラスの状況によって、保育者が意図して導入していったり、子どもの「つぶやき」から提供されたりするものだと改めて感じた。みんなで耳で聞き、目で見るという大型絵本に出会うことにも、何か、その時その場に、子ども達が求めている実態があったのだと見つめ直した。教材としての『絵本』の役割は、1つではないと思う。暮らしや遊びの状況に応じて変わることを学んだ。

～「資料 2 歳児の遊びに満ちた保育を探る」というテーマに重ねて～

まず、2歳児クラスの子どもたちの実態・心理をどう捉えるか。今回の実践では、4月当初の姿を担当は、「大変活動的であるが、その一方で甘えきれない不安定さ」の両面をもった子どもたちと捉えている。このスタートの姿を2歳児の心理として見てみる。1歳半頃から、自分の「思い」や「意図」に基づく、自分を主人公とした行動が成立してくる（自我の芽生え）。1歳代は「イヤ」と反発することで大人と一体化されていない「ジブン」を主張していたのが、2歳代では、例えば、公園でお友だちが見つけた松ぼっくりではなく、「自分が探した」「自分で拾った」「自分の松ぼっくり」というような、ちょうど一人称も出始めるこの時期、相手との違いで確かめながら「ジブン」にこだわるようになる。トイレトレーニングなど、手伝おうとすると「ダメ」と言って「できる自分」を誇示。かと思えば、出来たら「見てみて」と言ったり、失敗するとわざわざ母を叩いたり、すねたりする。「見てて」に込められた二つの意味～「手は出さないでミテテ」でも「背中向けしないでミテテ」といった「大人から離れて行動したい、でも見守ってほしい（自立と依存）」といった相反する気持ちが揺れ動いている子どもたちである。「ジブン」を意識し始めるからこそ、周りの大人や友達にもわかってほしい、認めてほしい。このように2歳代頃から、「行為と自我の要求の二重化」が見られるようになる。

「要求の二重構造」これは、いずれ発展し4歳代の自制心というものとなっていくその根っことなる。2歳代の様々な要求を周りがどう受け止めていくかで、安定して「失敗したけど今度こそやってみよう」などという、粘り強いコントロールの力が4歳代に繋がっていく。このことから、接続期の2～3歳代にかけて発達的にとても重要な時期だと考える。

この実践の展開では、一人ひとりの両方の気持ちを受け止めながら、それに重ねて、友だちとの生活の中で、友だちとの中に居場所を感じたい、「友だちと繋がりたい」ということも見通し、2つの目を持って遊びを展開している。

○子どもの視線の先を受けとめる題材

「子どもの視線の先に目を向ける」ことは、子どもと見つめ合っているとは解らない子ども理解の出発点。その視線の先を受け止める題材として「はらぺこあおむし」があった。みんなで見るから、みんなの興味が重なるという効果があった。特に、言葉をメロディーに乗せて出合わせるという共通体験の提供。2歳児でも親しみやすい音域で、身体に響く、気持ちを揺さぶる効果があった。読み聞かせの語りとは違う、身体に訴える歌と一緒にみんなで見たという絵本との出会いが、遊びの出発点となった。

また「繰り返し」が実践の特徴になっている。1歳代の質問期に見られる「今・ここ」にあるものでの確かめではなく、2歳代では、過去の経験や知っていることを思い浮かべることができるようになり、内面の世界が広がる。やがて道が繋がり地図を描き始め、思い出話を話せるようになる。発見が子どもたちに喜びや感動を引き起こし、その喜びを共有するなかで、生活の面白さを拡大しながら友だちと繋がっていくという『繰り返しの効果』が見られた。

○一人ひとりのエネルギーを受けとめる題材（思いきり発散して遊べるように）

よく滑るローラー、感触のよい絵具…あおむしの世界のイメージを重ねて、イメージを引き出す足場。子どもたちを驚かせたい…保育者の遊び心として子どもたちが心を動かす体験に結び付ける配慮が見られた。

○子どもたちのイメージを重ねる環境づくり

身近な空間（クラスの部屋～トイレ）を絵本の世界にしたて、生活の一部に「あおむし」がいる。クラスを生活拠点にする意味づけ、生活空間の中に見通しをつくる効果があった。絵本と同じ場面が生活にあることで、「一緒だね」と、生活を足場にしながら友達との共通体験ができるような仕掛けが、絵本によって提供された。

○「自分の〇〇」の気持ちを受けとめる…「あおむし」人形マイドールの導入

2歳代は他者と異なる自分を感じるために、人との関係に敏感・慎重になりやすい。相手が自分を受け入れてくれるかとても気にする。反面、自分の領域を守るために、嘸みつきが出たり、友だちとトラブルになりやすい。自我がからみ意固地で頑固なため、解決が難しい。物の取り合いの場合には、「～したら〇〇してね」といった時間の見通しが出来る言葉かけが大切。2歳児に育ってきた、イメージの力に訴えて、間を置く言葉かけが有効と言われている。その中で、みんなのものがいっぱいある園だからこそ、自分だけの「私有物」を1、2歳児クラスにどう導入していくかが各地の実践で試されている。今回は、課題となったが、また各園でも検討してみたい。

○友だちと繋がるクラスの文化を耕す

「わらべうた」の導入では、心地よい歌やストーリーにのせてあったというところに特徴があった。イメージを分かち合う。一緒に心を動かすという体験を積み上げた後に、相手の気持ちを理解しようという構えが出来ていった。2歳代の友だちとの関係づくりには、自分が相手を受け入れ、相手が自分を受け入れてくれるという、相互受容の関係を築くことが大切。その為には、共通の世界があり、「一緒、おんなじ」の共通体験と、「入れて、いいよ」の双方の領域に受け入れられる喜びや、譲れるという自分を誇れる体験が必要。そして、大人への「見てて」から「みんな見て」と気持ちが友だちに広がっていくことを通して、仲間づくりを丁寧にしていきたい。集団づくりが一步も二歩も早い2歳児たち。集団づくりをする前に、仲間との共感を感じ取れたところで、3歳児クラスに繋げていきたい。2歳児保育は、3歳以上児クラスへの大切な接続期の保育。友だちとの関係をこういった形で丁寧に積み重ねながら築いていけたらいいと感じた。